日本の軍捕虜となったあるオーストラリア人の記憶
——小説 No Time to Look Back から——

佐久間 美羊

1. はじめに

オーストラリアの国民統一には戦争記憶が少なく、かつ古くまでの伝承が少ないということである。第一次世界大戦時に、オーストラリア・ニュージーランド連合軍（アンザック）がトルコのガリポリ上陸した4月25日はアンザック・デーと呼ばれる国民の祝日になった。また、その時仲間に告げられた苦しみを分かち合い、助け合いの精神はメイトシップと呼ばれ、オーストラリア連邦になって間もない若き国家の国民性として広く誇われた。首都キャンベラにあるオーストラリア戦争記念館は、オーストラリアが参加した全ての戦争についての展示と追悼施設を兼ね備えており、2000年から2003年に至るまで4年に渡りオーストラリア観光客を受けている。また、どんなに小さな町に行っても町の中心には戦争慰霊碑がある。これらは「当時の共同体の共有性を有効に保証する過去の認識として広く認知された…（公共の記憶）」である。そして、元日本及びドイツがアンザック・パレードへの参加の政府高官らが拒否したり、小泉首相（当時）がオーストラリア戦争記念館を訪問した際に、新聞各紙が大型写真付きで大々的に報道1）することにより、公共の記憶は語り継がれ、神話性を高め、その特権的地位を保っている。

オーストラリアの作家を訪れて気付くのは、必ずと言っていいほど「戦争」コーナーがあることである。前述のガリポリ関連の本が人気のようだが、第二次世界大戦、とりわけ対日本戦関連の本もかなりの数が挙に並ぶ。ハム・ネルソンによって、ドイツ軍の元捕虜もしくは元兵士であった人たちは、これほどたくさんの体験記は書き残しではないという15）。つまり、個人の記憶もこうして創出され今日に至っている。

公共の記憶、個人的記憶、そして決して呼び覚まされることのない記憶——今日の「友好的な」日韓関係は、絡み合い、もつれあった様々な層の戦争記憶の上に築かれている。

本稿では、第二次世界大戦で日本軍の捕虜となったオーストラリア人、レスリー・グリーナー（Leslie Greener）16）が書いた小説 No Time To Look Back（1950）17）（邦題「かえみはせじ」（1951）18））を取り上げ、公共の記憶に回収されなかった、そしてされなかった個人的記憶を検証する。オーストラリアの一捕虜から見た日本人、そして戦争とはどのようなものであったのだろうか。文字を書く行為を通じて、そして小説というかたちで再構築された一個人の記憶を辿り、大文字の歴史に現れてこない声を再想起させる事を本稿の目的とする。

No Time To Look Backを取り上げた理由は次の2点である。一つは、元捕虜における戦争体験記は終戦直後から現在に至るまで数多く出版されてはいるが、この本は1950年という戦後極めて早い時期に出版されているということである。これは1951年のサンフランシスコ講和条約、さらには日独の政治レベルでの外交が始まる1957年よりはるかに先立っている。あえてこの時期に元捕虜である作者は何を訴えようとしたのだろうか。二つには、この本の日本語版「かえみはせじ」が、『朝日新聞』で「日韓経済交流」19）と大々的に紹介された点が挙げられる。作中の日本人通訳のモデルとなった元日本軍付き通訳の写真とインタビューを載せたこの記事は、「かえみはせじ」の人道主義的側面を強調し、友愛小説と訓い、日韓関係の進展を説いている。しかし、果たして本当に小説はそのような内容なのかという
疑問が残る。
本稿ではまず日本人及び捕虜自身がどのように表象されているかを分析し、さらに作中に描かれた加害行為、そして小説の題名 'no time to look back' に焦点をあて、著者の戦争観を汲み取る。グリナーは戦後の日豪関係、そして戦後に生きる人々全てにどのような提示をしていったのであるか。一説から、戦後の経済化をもとめた日豪関係で見落とされていた側面を浮かび上がらせ、新たな日豪関係への手がかりとなることができたれば幸いである。

2. オーストラリア人捕虜体験記に関する先行研究

ロビン・ガースターは、第一次世界大戦から1980年代までのオーストラリアの戦争体験記を体系的に研究したが、第二次世界大戦の多くの捕虜たちが体験記を書き残したことについてこの分析している——アンザック神話などで勇敢な兵士たちが崇拝されてきたオーストラリア社会で、戦闘を奪われた捕虜は兵士として忘れ去られていた。その軽蔑を覆すために、自分たちがいかなる苦難を経てきたかを公的記録に残すことが捕虜たちには必要であり、こうして多くの捕虜たちが体験記を書き著した。そのため、「戦時期の屈辱に付きまとっていた捕虜回想録の著者は、回想録でかつての敵を無慈悲に攻撃し、間接的に復讐することを常に行っていた」。そして捕虜回想録に描かれた日本人は、いくつかの例外を除いて、「殺人狂か、悲しむべきことだが、サルのような道化師のいずれかとして描写され」た。このような復讐の跡に満たれた捕虜体験記の中で最も成功を収めたのは、ラッセル・ブラッドンによる The Naked Island であった。これは1972年までに100万部売り上げたベストセラーとなった。ハッフリ・マック・イーンは、「日本軍の捕虜による一人称の記述語でこれほど多くの読者を得た本は他にならないものだから、The Naked Island は捕虜体験に関するオーストラリア人史記を形成するのに特別な地位を占めている」。と述べている。そして、ブラッドンの文体こそ人種偏見に満ち、復讐相手として日本を捉えていた以外の何物でもなかった。捕虜回想録がこのような社会的、政治的、経済的条件を満たして発表されたことによるか、または日本軍捕虜を特定の対象とすること自体が、彼らの記憶を歪ませたのである。
オーストラリア研究 第20号 2007.3

1924年、軍の縮小に伴い解雇されたグリナーは、親に対する義務を果たすことができず、自身の旅に出る。そしてニュージーランドに渡り、目雇い労働者として数々の仕事を経験した後、クライストチャーチ美術学校に通う。パリに移り住み芸術活動を続けたグリナーの力はパリのサロン（Paris Salon）に選出するほどであった。その後、エジプトでエジプト古代史を研究し、シカゴ大学東洋研究所ルクソール調査隊に加わる。1938年にはオーストラリアに移り住み、ジャーナリストとして働く。しかしながら、第二次世界大戦が勃発。あくまでも予備将校の身分であったグリナーは1941年、測量連隊として入隊、後に陸軍情報部に同連隊を従軍する。この約1年後の1942年2月15日、グリナーを含むオーストラリア第8師団は、シンガポールで日本軍の捕虜となり、チャンギ収容所へ収容される。

世界各地を旅歩き、異文化に触れ、多才であったグリナーは、チャンギ収容所での活躍も突出していた。捕虜として困われてから終戦までの3年半の全てをチャンギ収容所で過ごした彼は、その間チャンギ文学会の結成、劇場建設等様々な文化活動を展開している。グリナーは教育者として、提言者として、理解者として、知識人として、他の捕虜に接し、そして賛同を得た。捕虜からは親しみを込めて「学長」と呼ばれていたという。

グリナーを慕ったのは捕虜仲間だけではなかった。1943年2月13日、チャンギ収容所に1人の日本軍行き通訳が赴任する。彼の名は寺井寺範。関西学院大学英文学を卒業し英語が堪能であった寺井は、収容所でグリナーと親交を深め、No Time to Look Back（No Time to Look Back）に登場人物、佐藤通訳のモデルに、そして日本語版「かえりみはせじ」の翻訳を担当することとなる。

寺井についてグリナーは後にこう述べている。

He had an astounding knowledge of English art, literature, drama and music. Terai hated the war […] and did what he could to be kind to Australian and other prisoners.18

一方、寺井はグリナーとの思い出をこう振り返っている。

彼には抱擁力があった。彼と一緒にいる時、私は些かの警戒心を持たずに、随分打ち解けた気分でいった。知性は冷たいと人は云う。しかし彼の知性には愛情の裏打ちがしてあった。同胞でありながら、立ち解け得ない周囲の軍人達との同居でいやまし孤高に、私の心は彼と共にある時にのみ、しばしば寂寥から解放されることが出来た。ともに文学を、音楽を、美術を、家族へのエモーションを語った19。

グリナーは、戦後オーストラリア・タスマニア州青年教育部长を経て、シカゴ大学のエジプト遺跡調査に再従事する。その傍ら執筆活動を続け、1957年にはオーストラリア連邦文学賞金を受賞、またオーストラリア放送委員会（ABC）のラジオやテレビ番組の脚本も手がけた。1974年にタスマニアでグリナーが死去した際、オーストラリア総合学術雑誌『プレディン』は、グリナーをチャンギの偉大な人物の1人であったと紹介した20。

4. No Time to Look Back

1) あらすじ

小説は、チャンギ収容所がモデルであるハンコール日本軍捕虜収容所を舞台に繰り広げられ、主人公である従軍牧師クリスとして捕虜と日本軍人の間でなされる様々な小話が、第三者の語り口で語られる。

物語は牧師の所に負傷し記憶を失ったアンドロスが運び込まれる場面から始まる。牧師としての自分の力に限界を感じつつあった牧師は、アンドロスからあらためて神、人間愛の尊さ、忘れつつ
あった謙虚さを学び、アンドロスに精神の慰めを見出していく。

収容所司令官の阿多大将は捕虜の間で評判が悪く、捕虜の前で切腹の作法を見せたり、脱走兵の処刑を執り行う。一方、日本軍に従用されているシーク人監視兵と牧師が小競り合いを起こしていた際に助けてくれた佐藤通訳は、その後も牧師へ妻モーリンからの手紙を届けたりと計らいを見せるが、個人に力点を置く西洋とは異なる日本の国民精神を牧師が理解できないのを残念に思っている。その佐藤が、捕虜によって行われるヴァイオリンのコンサートにどうしても行きたいという。コンサート後の教会で佐藤は、牧師、アンドロス、さらに親しみ捕虜であるペンドルとスリランカ人アランにピールを振る舞い、自分の思い出としてジョッキーを取っておいてくれと頼む。いうのも、佐藤たちと共に大勢の捕虜が泰緬鉄道建設のために移動させられるからであった。

牧師の気かりの一つは、戦前画家であり美を好むペンドルのことであった。彼は戦闘中に、日本軍と銃合わせになり捕えられた。その時救出してくれた中国人少女洪丘画に、今でもこっそり会いに行っているという。彼は泰緬鉄道へと旅立つ前のある夜、牧師と共に収容所を抜け出し、丘画と結婚式を行う。

数ヵ月後、鉄道建設の生存者が変わり果てた姿で帰ってきた。佐藤は捕虜だけでなく日本軍も同じ危険にさらされたと言う。日本兵の一隊が行進しながら「海ゆかば」を歌のを見、佐藤は牧師に素晴らしい歌をと説明する。ある日、阿多大将を乗せた車、続いて捕らわれた丘画を乗せた車が通りすぎる。その夜、阿多の家が放火され日本軍は犯人の捜索にあたる。日本兵の「ロカバイ」が佐藤からの包みを持って牧師のところやってくる。そこには牧師が丘画の母に渡した結婚証明書と、それを見つけてしまったがゆえに軍部への義務感と牧師への友情の狭間で苦しんだ佐藤の遺書、さらに佐藤が最期に使った刀が入っていた。他にも、イギリスからの手紙が入っており、それには愛する妻モーリンの死を知らせる手紙であった。公道では担架が運ばれていた。その上には阿多の家の焼け跡を見に行った際に日本軍に射殺されたペンドルが横たわっていた。その後、日本兵の「剣歯の虎」と他の捕虜とのけんかの仲裁で傷を負ったアンドロスは小舟でバンコールから逃げるのを決意する。牧師は「海ゆかば」の一部“There is no time to look back and think of ourselves”を口ずさみ、アンドロスは脱出に成功するだろうと仲間のアジャックス大尉を励ま

2）日本人及び捕虜の表象とその意味
①日本人一般
敵であり、捕獲者であり、捕虜達の命と生活を手中に収めた日本人を、グリーナーは小説の中でお互いを再構築し、表象しているのであろうか。そこでそのような人物表象にはどのような意味が込められているのかを論考する。

ジョン・W・ダワースは、太平洋戦争中の連合軍と日本軍のプロパガンダを分析し、人種差別の表象が両者共に使われていたことを明らかにした。そして、連合軍から見た日本軍表象としては、「人間以下（動物）」「非人間」「劣等人間（原始性、幼児性、集団的逃走者）」等を挙げている(21)。これら表象には、敵の日本人も自分たち西洋人と同じ人間である、という観念が欠如しており、「われわれ」と「かれら」の心理的距離を作り出したとしている。また、「出っ歯の日本人は物語の普通の人物像(22)」であり、これはオーストラリア人兵士ピル・エリオットも「全てのプロパガンダでは（日本人は）眼鏡をかけて、出っ歯な小さななにやらであった」(23)と証言している。

No Time to Look Backの日本人描写でもこれ「幼児化」、「動物化」、「歯」が用いられ、ダワースが連合軍のプロパガンダを指摘した際の表象に沿う形となっている。しかし、No Time to Look Backなどの捕虜体験記における日本人表象は、プロパガンダにより吹き込まれ、影響を受けた成果だけでなく、自らが日本人と接続した経験を持つ作者によって生まれ出された表象である。そのため、戦闘意識を高めるために、相手イメージを「幼児化」「動物化」させた戦時期のプロパガンダとは事情が異なる。No Time to Look Backにおける「幼児化」「動物化」「歯」のイメージは、グリーナーによって既に内面化された日本人イメージである。以下に、「幼児化」「動物化」「歯」
「幼児化」

まず、名を持つ日本人のうち佐藤を除く4人には、捕虜たちによって「幼児化」を除く3人——そのうち2人は司令官である——のあだ名は全て、「baby」か「boy」と言う単語がつけられている（Atta-boy・Danny-boy・Rock-a-bye Baby）。これは相手を「幼児化」としていたと言える。

実際、日本人にあだ名をつけて呼ぶという行為は、チャンギ収容所内で広く実行されていた。捕虜の一人であったジョージ・スプロッドは日本人の名前を発音しづらかため、多くの日本人にはあだ名をつけられ、そしてそのほとんどは侮辱的なものであった、と回想している。スプロッドや同じく捕虜であったケ尼斯・ハリスンにより提示されたあだ名には、白色人種から見て黄色人種である日本人を「yellow」という単語を使い差別する以上に、さらに濃い色である青や黒などが使われている（黒服、黒眼、黒マンなど）。さらに人間以下とみなす動物化も行われている（鷲、馬、びひる、ネコ、豚、トラ、ウジ）。しかしながら、「No Time to Look Back」で見られる「baby」や「boy」を使って相手を幼児化するあだ名はスプロッドやハリスンの例には男私生児（Boy Bastard）以外は見当たらない。「baby」や「boy」を使ったあだ名はあまりありふれていたないと何える。

元々、名前付けというのは、つけられた人物のアイデンティティを規定し、時には奪い、名付け側の決定的な支配を意味する一種の暴力である。つまり名付け側は「すべてを名付ける、言語化することができる神の位置に移動したことになる」。捕虜による日本兵へのあだ名付けの場合、つけられたあだ名は捕虜の内輪でのみ使われており、名付けられた側もその名前を受け入れていない。そのため、本来の名付け行為は異なり、完全には名付けられた側を支配していないと言える。しかし、あだ名をつけたことで、思考の中では支配していたことは変わりない。さらに、本小説ではそのつけたあだ名が、他の体験記ではあまり出てこない「幼児化」したあだ名であるために、捕虜の身に甘じ、支配下におかれておきながらも、敵に対しては自己優位性を保ち、見下そうとした捕虜の姿勢が、より顕在化している。

さらに、「幼児化」の例として「little」という単語の多用が挙げられる。これは無名兵士を指す時に非常に頻繁に使われている。確かにオーストラリア人と日本人の平均身長を較べてみて、日本人が物理的に小さいのは否めないかもしれない。しかし、日本人でも一緒に背が低いわけではない。エリオットは、前述の発言につき、「私の初めて見たジャッピは186cmもあるアジア人だったんだよ」（26）と述べているし、同じく兵士であったジャック・ファナガンは、「我々の多くは、彼ら（日本人）はただの小さな爆竹で、たったり出くわしても我々にとって心配に値しないと思っていた。しかし彼らに会って、彼らを見た後、自分達の考えを変えなくてはならなかった。なぜなら彼らは非常にがっしりした奴だったから」（29）と振り返る。戦闘前に自分達が抱いていた「小さい日本人」イメージは必ずしもそうではなかったことを明かしている。

日本人に最も高い人間はいるという点に、クリーナーは自覚的であったのだろう。地の文において「little」は、一般的な日本軍全体、または無名兵士を形容する時にのみ使われており、名前を持つ登場人物の形容には使われていない。このことからも、一般的な日本人を描く時にのみ、概念化された「小さい日本人」像を再生産させていたと言える。

ではなぜ「小さい」を形容するのに「little」という単語を使ったのであろうか。実際、「小さい」登場人物は日本人だけではない。「小さい」連合軍捕虜のフレシェ少佐には「small」、スリランカ人アランの描写は「slightly built」という単語を使い、日本兵の「little」と区別をつけていた。このことからも、物理的小ささを表す客観的な形容詞を捕虜に使い、嫌悪правленしだった感情が含まれる主観的な形容詞を日本人には使う、という具合に、クリーナーは意図的に形容詞を使い分けていると推測できる。

また、フレシェもしくはアランに関しては、彼らが初めて登場する時のみに人物紹介として身
体の小ささを表す形容が用いられている。これに対し、日本兵は「little」の形容が会話文でも地の文でも執拗に繰り返されている【30】。

さらに、連合軍捕虜自身の背の高さを「his greater height」として「great」という単語を使って、日本人と比較している。ここでは、主観的な形容詞が用いられていることから、グリーナーの身体の大小に関する思いの丈が如実に現れている。

このように、あだ名付け、形容詞「little」の多用、自軍の捕虜の身体を表す表現との違いなど、様々な方法で「幼児化」が日本人表象において行われている。

「動物化」

日本兵を動物に例える「動物化」も、様々な動物を用いてなされている。

爬虫類（lizard, frog, toad, reptile）は会話文、地の文の両方において、全て阿多の形容に用いられており、ふてぶてしさ、冷酷さを表している。司令官という一番上の豊かな生活を送っている人間に対する嫌悪をより効果的に描写している。

また、叫んでいる様子の直喫としては「犬」（shouting like dogs【31】）、「壯牛」（shouting like a bull【32】）が用いられ、狂犬や蠍牛など暴力的な情動過多を連想させる表象を作り出している。「剣歯の虎」（the Sabre-toothed Tiger）には名前自体に「虎」が使われており、彼の猟猛性が顕著に表されている。

さらに、狂ったように目的もなくただ仕事をしている日本兵を顕に例える（The Japanese appeared as frantic and as aimless as ants【33】）ことで、描写を詳しくするだけでなく、「目的もなく」と「顕のように」が相互に補完しあって愚劣さを表す軽蔑描写を増強させている。

このように、多様な動物を動員させ、日本兵を動物と同一視することで、日本兵の否定的な側面を効果的に表している。

「歯」

まず、暴力的な側面を持つ「剣歯の虎」には、あだ名自体に「歯」がつけられている。しかもただの歯ではなくサーベル（剣）のような歯ということで、前述の虎も加え、このあだ名には暴力的性質の三つの要素が集中されている。

さらに阿多と「剣歯の虎」の歯には、「bare：露出する」という語を加え、剥き出した歯を強調する表現が度々見られる（bared his teeth【34】 / his yellow teeth bared in a bully's grin【35】）。また、「剣歯の虎」や「ロッカバイ」が笑う際は、「歯を見せて笑う」という意の「grin」が用いられている。

日本兵と歯が象徴的に融合された表象の例としては脱走兵の処刑シーンを挙げたい。

阿多の手によって処刑される捕虜たちが処刑場へ連れ出される。

Nobody had a knife. The Indian sawed at the cords round their (= prisoners') wrists with his bayonet but could not cut them. The Japanese soldier picked at them, grunting in haste. He even knelt and pulled at them with his teeth【36】。

銃剣で解けない縄を絞で解こうとするこの姿は、とても異常に映る。そして処刑執行の直前に繰り広げられるこの行為は、（結局最後は銃殺されるものの）あたかもこの場で処刑が歯によって下されているようなく、あまり呑み殺されている雰囲気を醸し出している。これは戦時中フィリピンやニューギニアで日本軍人によって行われた、連合軍捕虜、アジア人捕虜、現地人、そして仲間の日本兵への人肉食行為を彷彿させるものである。

処刑の最期の場で歯を用いる日本人という表象は、日本人の野獣性、暴力性を引き出し、「殺人狂」としての日本人像をまさに確立させている。

これまで、日本人表象に使われた「幼児化」、「動物化」、「歯」の表現を見てきた。そしてそれらは、グリーナー自身が体験した恐怖と経験、そして文才から生み出され、緻密に計算を尽くされた描写であり、今までに作られた既存の日本人像を強化する表象であったといえる。

では、佐藤の表象はどうなっているのであろうか。
②佐藤通訳

名前

まず、佐藤通訳は、名をもつ日本人登場人物の中で唯一捕虜による名がつけられておらず、本名の「佐藤」として呼ばれている。佐藤は自らの名前を名乗り、捕虜達は提示された名前で呼んだ。これは捕虜たちが佐藤を佐藤として認め、受け入れたことになる。つまり「佐藤」という本名を残すことで、捕虜たちが人格を評価している人物、という表現になっている。

生得的外見

佐藤の生得的外見の特徴が初登場シーンから説明され、高い背丈、はっそりとした手、面長の顔などが挙げられている（tall for his race/ the slender hand to which they belonged was not that of a blunt soldier/ It was a long face with a small pointed chin, not round and grotesquely full like those of many of the camp guards（37））。確かに背が高いことに関しては、前節で見た「幼児化」された日本人一般の表象と異なっている。しかし、佐藤の生得的外見を、「彼の人種にしては」「武骨な兵士の手ではなかった」「収容所の多くの監視兵のまるって異様に太った顔とは違っていた」と、他の日本兵との比較を用いて叙述している。ということは、クリーナーが意図的に他の日本兵と異ならせて佐藤を表現し、さらに読者にその違いへの意識化を促しているといえる。

仕草及び行動

佐藤が登場時はその他の日本人表象で使われた「grin」は使われず、一貫して「smile」が使われている（sato smiled again（38））。この点でも、佐藤と、その他の日本人の描写がはっきり分かれていることが読みとれる。

また、彼の声は静かで、行動はゆったりとしている（the newcomer's voice was quiet（39））。これは「犬のよう」に叫んだり、「蟻のよう」にせわしく仕事をしている日本兵とは、静かと動ほどの対照である。

知的内面

さらに、佐藤の描写には外見だけでなく知的内面にも注意を払った描写がある（To Padre Choyce, observing them（= Sato's fingers, they appeared to be moved less by an impulse to draw the weapon than by some inner conflict within their owner（40））。つまり佐藤が何を考えているか、なぜそのような行動を取るのかまで詳しく描写しようとしている。

また佐藤は牧師に、日本精神と西洋の個人主義の違いを説明し、「海ゆかば」の意味を教えていく。今で、ガスターの言う「殺人狂」や「サルのような道化師」、ダワーの「人間以下（動物）」「非人間」「劣等人間（原始性、幼児性、集団的暗闇）」が含むように、日本人は思考する者として表象されていなかったと言えよう。そこに知的部分を持つ佐藤を入れることで、より人間として近づいた、西洋人が理解できる、西洋人と意味疎通ができる一つの日本人像を仕立てあげている。

付加的外見

しかも、このような他の日本兵とは異なる呼び名、生得的外見、行動様式が描写されていても、それでもやはり日本人として佐藤を見ていくことには変わりはない。他の日本人に表象されていない知的内面で佐藤が発する言葉は、日本精神の強化が語られる。つまり、佐藤はアポ多大将の通訳だけではなく、日本精神の通訳、代表者である。

そのため、佐藤の表象には日本人の記号が必ず付記されている。それが刀である。佐藤が登場するシーンは1箇所を除いて必ず刀についての記述がある。「刀を持っていなかった」（He was not wearing his sword（41））とわざわざ述べるほどである。「衣装というのは、（そういう隠れた皮膚であることに）社会から張り付けられた、いわば社会的皮膚という役割を帯びているわけであり、それが身体を束縛するもの、あるいは身体性を無化するものとして現れる」（42）と前田さんの述べているが、生得的外見の非日本性が無化されるほど、刀は佐藤の日本人性を強烈に引き出している。

自決をした佐藤は遺書、さらに最期に使った刀を自分の息子に渡してほしい、と自軍の兵士では
なく牧師に託すのであった。つまり、刀は最後まで佐藤の身代わりとして機能し、その処遇が牧師に託されたのである。刀の譲渡というのは降伏の際に関係者に渡したり、自分の殺した兵士から敵として奪ったりするものだが、ここでは自らが捧げており、物語の中では物事が終わっているものの、佐藤の死と刀の譲渡により、日本敗北として戦争の結末が暗に示されている。切腹という武士道の最期を選んだ佐藤は、やはり刀の象徴するステレオタイプ的な日本人であった。

以上のように、佐藤には他の日本人表象で見られた「幼児化」、「動物化」、「歴史が使われておらず、異なる呼び名、生得的外見、行動様式、さらに知的分野で備えた人物として表象されている。しかしこのように既存の日本人像から外れていたことも、日本の国民精神を讃える佐藤はあくまで日本人であり、そしてその日本人性、刀を佐藤とセットで描写することで際立たし、繰り返し想起させられている。そしてただの「西洋人捕虜に親切を施し媚薙舞う善良な日本人佐藤」ではなく、「ステレオタイプなまでの日本精神をもちながらも善良な日本人佐藤」として描くことで、より日本人の善良性を強烈にアピールする効果がある。

では、このような「良き日本人」佐藤を登場させる小説の中で、連合軍捕虜自身はどのように表象されているのだろうか。

③連合軍捕虜

日本人描写において「幼児化」、「動物化」が行われているが、実は連合軍自らが幼児、動物に例える描写も見られる。

牧師が、ベンドルと丘の結婚式を執り行うため収容所をこっそり抜け出すシーンでは自らを「遠足に出かける子供のようだ」（we are like a couple of kids on a picnic）と例えている。収容所といった八方塞いで単純な毎日を過ごす中で、刺激を見出し、新鮮なものとして受けとめる捕虜を、純粋な子供として例える「幼児化」である。

また、自らの惨めさを強調する意味で以下の表現が見られる。

The white coolies（44）forgot that they were human mules：（45）

日本人に飼いならされ、酷使される捕虜という点で、「牛や馬」、「家畜」（human mules, bullocks, browsing creatures, human cattle）を用いる「動物化」が行われているが、「human」という語を付け加えることで動物に例えながらも、あくまでも人間性を維持しようとしていることが伺える。

この点からも連合軍の「幼児化」、「動物化」は、日本軍描写で使われた「幼児化」、「動物化」の効果と違う意図を持って使われていることがわかる。

3）加害行為

次に、グリーナーの戦争観を考察するために、加害行為の描写を読み解いていく。

①日本側の加害

No Time to Look Backの中では、日本軍による捕虜処刑シーンが4箇所出てくるが、どれもしごりして描かれている。その中の一つは、ベニドルが牧師に自身の戦闘中の体験を打ち明けるシーンである。ベンドルは戦闘中に日本軍に捕らえられ、目の前で仲間が処刑されるのを目撃した。

“He (= The officer) made them kneel in front of him, and he drew his sword and hacked at them. At the back of their necks he hacked. He couldn’t cut their heads off in one, like you read they do. He went on hacking when they had flopped forward and their faces were grovelling in the dirt, all scarlet and brown. Padre! He went on hacking, and grunting, till his sword was cutting the earth”（46）

刀の一振りで斬殺、というような知れ渡っている方法は、実際には機能せず、遠かに惨い状況が戦場では繰り広げられていたことを暗示している。
オーストラリア研究 第20号 2007.3

そして、「hack:めったぎる」という、より暴力性を帯びた単語を4回にもわたって繰り返し使用することで、今にも現場の音が伝わってきそうな感覚に読者を陥らせる。さらに、「辺り一面は緑色と茶色に染まっていた」と視覚に訴えることで、処刑の残酷性が強烈に伝わってくる描写となっている。

処刑シーンは4箇所だけであるが、日本軍による加害性は、直接的描写でなくとも、テクストには溢れている。捕虜の表象から、グリーナーの自軍への認識だけでなく、他者観も示され、それを通して他者である日本軍の加害性を見えてくるのである。

例えば、収容所の過酷な状況で瘦せ衰えた捕虜の姿を「骸骨」（not men but slow-moving skeletons, dead except for a look in their eyes which it was his work to keep there if he could）と表現し、薬品も衣類も食糧も欠乏している状況を引き立たせている。他にも、「腰が曲がって老人のようだ」と「焼け尽くされた森の木々のようだ」（They are like the tree of a burned-out forest）、「葉がすれあうように嘆き合っていた」（The men whispered together as leaves do）、「甲殻類がするように引きこもってしまった」（They have withdrawn into themselves, as shelled creatures do）、「叩き潰された袋のようにわずかに飛び上がる」（rise a few inches from the ground, like a punched bag）といった様々な直感を用いて衰弱した捕虜を表象している。そして、これらは比喻であるため、捕虜達は「骸骨」でもなければ「老人」でも「木々」でも「甲殻類」でも「叩き潰された袋」でもない——このような相貌をしていた彼らは「人間」であり、「人間」でなくてはならないのだ。これらはただの説明表現ではなく、捕虜をこのように描写することでこのような状況に追い込んだ日本軍の加害性を間接的に批難しているといえる。加害行為を直接指摘してこなくも、著者の怒り、訴えがにじみ出しているのだ。

このように、No Time to Look Backは、決して日本人におもなるような手柔らかい表現に満ちた友愛小説ではない。

しかしながら、No Time to Look Backにおける加害行為の提示は日本軍のそれだけに限ったことではなかった。グリーナーは自軍の加害性をも告発しているのである。

②連合軍側の加害

脱走捕虜3名が日本軍に処刑された後、彼らを葬りながらペンドルが牧師にある告白をする。

"We're ugly—not just the Japanese—all of us. Did you ever hear of the five men on Mahagnar? No? You wouldn't. They kept it dark. ... Filthy, filthy ugliness of man! All of us. Padre! It's easy to blame the Japanese for everything. They're the enemy—let them take the rap for all that's foul! But we've done it too."

ペンドルは続けて言う。インド人5名が、取り調べのために移送するよう連れてこられた。日本軍から退却中であったイギリス軍司令部は「移送する手段がない」という5名を銃殺した、と。そしてさらに、連合軍によって処刑された者が、インド人すなわち「黒いやつら」であったから記録に残らない、という組織的な人種差別の暴露をしている。

被害の訴えに較べ、加害の告発の声というのはなかなか外に現れてこないのが現状なのである。オーストラリアの文学史上で同時期に起こった以下2つの出来事は興味深い。元陸尉で日本人との通訳であったアラン・クリフトンはTime of Fallen Blossomsの中で、1946年に広島に駐留していたオーストラリア軍が日本人民間女性を強姦していた、と記述した。そのため懲戒を受け、1950年代にヴィクトリア州からタスマニア州への逃亡を余儀なくされている541。また、トム・ハンガーフォードも、小説Sowers in the Windの中でオーストラリア駐留軍が日本に対して経済的、性的搾取を行っていたことを扱った。この本は1949年に『シドニー・モーニング・ヘラルド』の文学賞を受けたにも関わらず出版社から出版差し控えを受け、出版されたのは結局1954年であった。前述のロビン・ガスターは「ハン
ガーフォードは日本人に対して非常に明敏に、好意をもって描いた。これは日本軍と共戦した人々にとって好ましくないことであった」と述べている(56)。

つまり、オーストラリアは一貫して被害者としてのストーリーを生産し、加害者のストーリーを抹殺してきたのではないか。そして、被害者である自国という像を作り出すことは、「復讐相手」として日本を記憶していくために、非常に効果的であり、必須であったと言える。このような時期において自軍による加害の記述がいかに困難であったかがわかる。

ではグリナーが敵軍のみならず自軍の加害行為も告発することで最終的に訴えたかったことは何なのか。それは、敵も加害行為をしているが、自軍も同じ事をしていて、似たり寄ったりなのだから、敵を教示してあげよう、といった相殺提案なのである。グリナーはここで二つの図意を持っていたと考えた。

一つ目は、日本軍、連合軍のどちらかの善悪、優劣を決めるのではなく、両者同じ人間として捉え、人間が犯した罪の重さ、戦争を起こした人間の愚しさを説きわたったという点である。

二つ目は、人間としての過ちは認識した上で、それを直視する姿勢の重要性である。グリナーはインタビューで古代史の研究をやる意義をこう述べている。

Because the past, present and future are inter-related. The future can only come of the past. I want to know where we came from。(56)

これはもちろん古代史に限ったことではない。過去を知ることで、未来が開ける——それは過去の過ちを直視し、反省し、未来への教科書としていくことである。だからこそグリナーは、日本だけでなくオーストラリアが、そして人類が同じ過ちを犯さないために、証言として公言する必要性を感じ、敵軍のみならず自軍の加害行為も告発したのではないだろうか。

両軍の加害行為の描写は、敵味方の問題でなく戦争を人類の問題として捉え、また二度と繰り返さないためには闘に勝るのではなく、事実を直視すべきだ、という戦後を生きる者全てへの提言がひしめきと伝わってくる。グリナーの未来への思い、それは次節で小説の題について考察することにより、より深く読み解いていく。

4）「no time to look back」題に込められた思い

日本軍歌『海ゆかば』を寺井から知ったグリナーは『海ゆかば』の英訳の一部である「no time to look back」を自分の捕虜経験記の題名にした。とあとがきで紹介している。それに沿うようにNo Time to Look Backの中でも、兵士たちが歌っている『海ゆかば』を佐藤通訳が聞きつけ、チョイス牧師に教えられたという設定になっている。

元々『海ゆかば』は、聖武天皇が大伴一族を褒め称える詠を出し、それに歎願された大伴家持が詠んだ長歌に、1930年代になり信時澄が赞美歌を詠んだものである。1938年には文部省と大政翼贅会によって儀式歌に制定され、兵士や銃手に盛んに歌われるようになる(57)。

「海行かは水浸く屍、山行かは草生す屍、大皇の辺こそ死なれ、顧みはせじ」

If the war is on sea we will die/and become a portion of the deep sea./If the war is on land we will die/and become a portion of the mossy mound./Our utmost aim is to die/beside the Imperial banner./There is no time to look back/and think of ourselves。(58)

ここで注目したいのは寺井からグリナーへの翻訳の時点で、「海ゆかば」の原義が少しずつで伝わっているということである。

最後の行「顧みはせじ」を広辞苑第五版によると、「顧みる」には①うそう一度来て見る②背後をふりむいて見る③過去のことを見る④反省する⑤気にする、心配する⑥なさけをかける、世話をする、の6つの意がある。「海ゆかば」においては、⑤の自己の身の安全を気にかけるようなことはしまい、というのが通念の解釈である(59)。ところが、英訳では③の過ぎ去った過去について考え、いった意が採られている。
さらに、「顧みはせじ」の「せじ」は広辞苑にもあるように、「動作主体が話し手である場合に、自己の意志によってある事柄を否定するのに用い」とされ、主体は告詩者の大伴家持、ひいては兵士の強い意志、決意が現れているが、英訳では、"There is no time..."といった主体に欠けた訳になっている。

この二点を総合すると、英訳「海ゆかば」では「顧みはせじが『振り返る時間はいない、回顧する時間はいない』と解釈されている、と言うことがでる。つまり、グリナーは寺井から「海ゆかば」の原義とは離れた解釈を受けた。以下本稿では、誤解を避けるために、グリナーの理解した「海ゆかば」を「海ゆかば」として表記する。

では、この点を踏まえた上で、「no time to look back」とはグリナーにとって一体何を意味したのだろうか。そしてなぜこの部分を題名にしたのだろうか。その真意は訳者一人一人の解釈に委ねられていると思って過言ではなく、一義的な判断はできない。筆者なりの読みを本節では提示したい。

佐藤による「海ゆかば」の紹介場面の後、牧師は最後の行 "There is no time to look back and think of ourselves." だけを繰り返し繰り返し口ずらす。そして、その後小説内では、2度にわたってこの行が引用される。まずは、愛の妻であるモーリーンの死を告げるイギリスからの手紙を牧師が読むシーンである。そして小説のラストで牧師の精神の支えであったアンドロスが島から立ち去るのを牧師が見送る場面である。以上の2シーンからわかることが、牧師の心の糧が、幸せがするなりと手から離れ去る時に、その喪失感を埋めるが如くに異国の歌が突然想起され、牧師を強襲しているのである。

①音としての「海ゆかば」
牧師は日本語の「海ゆかば」を耳にするわけであるから、日本語の響き、あるいはメロディーといった聴覚における揺さぶりがまず大きいのではないいか。牧師にとってこの歌、音は、詩の意味を聞く前も聞いた後も相変わらず、最初から最後まで「気味が悪く恐ろしい」(weird and menacing)のである。それは「海ゆかば」が西洋のメロディーであるのに異国の言語である日本語で歌われていたからかもしれないし、牧師の騒染んだ賛美歌風の曲であるのに日本軍によって、リズムを取る軍人の行進に使われていたからかもしれない。

牧師が自分の愛する者を喪失する際に記憶としれて流込む「海ゆかば」は、自身の因わるの身という事実を再認識させ、現実へと否応なくと引き戻す作用をしている。このような記憶の到来によって、捕虜達の思考は絶えず断絶され、精神の世界においても安らぎを覚えることはない。彼らは物理的、身体的だけでなく心理的にも束縛をうけているのだ。そのような記憶は、実際「海ゆかば」のみでなく、ある者にとっては日本兵の叫び声であったかもしれないし、ある者にとっては友の死に顔や煙のにおいであったかもしれない。捕虜一人一人の無抵抗な状態のままの五感に降りかかっていたのである。

モーリーンの手紙のシーンでは "There is no time to look back and think of ourselves." の後、いきなり "It was so." という手紙を指す指示代名詞で始まる。また、アンドロスのシーンでは、"... There is no time to look back and think of ourselves." が2段に分けられた上、さらに中央寄せをされて提示されている。突然異国の歌がテキストから切り離され、宙ぶらりんの形でテキストに挿入されているのである。この意味性、グリナーは、当事者にしか経験できない捕虜の内部の錯乱をはんの少しテキスト上で読者にも追体験してもらいたかったのではないか。
新しい世界を築き上げるためには、過去の歴史を学び、それから学びで未来を築くことが必要です。この小説の結末は、過去を振り返り、未来を向かう旅を始めるというメッセージを含んでいます。牧師が過去の歴史を振り返ることで、未来への希望を見つけることを示しています。
オーストラリア研究 第20号 2007.3

look back and think of ourselves”に含意させていたのではないだろうか。

5. No Time to Look Backのその後

1）オーストラリア

No Time to Look Backは1950年にアメリカ・ヴァイキング社、カナダ・マックミラン社から、翌年1951年にはイギリス・ゴランジェ社、フランス語版はClub du Livre Francais、そして日本語版が早川書房から出版された。ヴァイキング社版が出版した際、筆者が把握しているだけでも『ニューズウィーク』、『タイム』、『カーカス』など有力雑誌を含む63誌において書評が掲載され、好評を受けた。売上も1950年5月5日から同年10月31日までに標準版4,164冊、輸出、特別版265冊に達している。

しかしながら、翌年ゴランジェ社から出版されたイギリス版はオーストラリアでも流通したが、結果は芳しくなかった。掲載された書評では好評を得たものの、その数は四誌に留まっている。ましてや「朝日新聞」のような「日縫編ぶ友愛小説」と評価する書評はない。さらに、日本語版『かえりみはせじ』が出版された際、ある雑誌は「ジャップが戦争での残虐行為について読む」と題した記事を組んだ程である。また、オーストラリアの売上とイギリスの売上を分けることはできないが、ゴランジェ社全体の売上として、1951年から1961年の十年間で3,739部（1958年3月から59年9月までの資料欠）の売上部数を上げているが、1961年9月29日の段階で立替金400ポンドのうち191ポンドが未払いとなっている。人口差を考慮したとしても、半年弱で4,000部を売り上げたアメリカ版との売れ行きの差は甚だしい。

なぜオーストラリアでNo Time to Look Backは日の目を見ることになかったのか。

第二次世界大戦でオーストラリアは、自国本土を国家誕生後初めて攻撃され、そして戦地では夥しい数の兵士を日本軍捕虜として失った。No Time to Look Backが出版された当時のオーストラリアは、BC級戦犯オーストラリア軍事裁判がまだ続いており、日本駐留軍兵士の「戦争花嫁」も入国が許されない反日色の強い社会であった。元捕虜は復讐相手としての日本、被害者としてのオーストラリアを体験記として書き、読者もそれを探し好んで読んでいたことは前述の通りである。

このような公共の記憶が形成されていく中でNo Time to Look Backは、オーストラリアで求められていた復讐相手としての憎むべき日本人像に合致する登場人物だけでなく、佐藤というそれにおいてはまらない善良な日本人像を提示し、悪意面だけでなく良い面を持つ両義的な日本人像を描き出した。さらにグリーナーの公共の記憶への挑戦は新しい日本人像の提示だけには留まらなかった。日本軍による加害行為だけでなく、当時、そして現在に至っても追及されず、戦争の記憶を表に現れてこない連合軍の加害性をも告発している。そして、何よりも「no time to look back」という題には、「過去を回顧しきりに留まっている時間はない」といった未来志向が含まれ、二度と戦争という惨事を繰り返さないためには日本への復讐に燃えるのでなく、過去を直視した上で戦争の歩みより新たな未来を築くことが必要だと反戦の姿勢を強く示していた。つまり、No Time to Look Backは大文字で彰られた歴史、共同体の記憶に挑戦したものの、社会に受け入れられず、そして抹殺された個のストーリーであったのだ。

2）日本

日本語版出版にあたって尽力したのは、あの寺井十勝であった。終戦後、グリーナーは日本に手紙を書き、寺井の安否を確認したのである。こうして二人は戦後も連絡を取り合うようになった。そしてグリーナーから本についての連絡を受けた寺井は、1950年10月28日のグリーナーへの手紙の中でもう翻訳を開始したこと、近い将来東京のよい出版社をみつけられるだろうと伝えている。

しかしその約1ヶ月後の1950年12月5日、グリーナーは代理人であるアン・ワトキンス社のナンシー・ブレットナーから日本版が割に合わない旨の手紙を受け取る。しかし、日本へのどうしても伝えたいメッセージとしてグリーナーそして寺井はあえて出版に至ったのだろう。その願いが叶い、翌年1951年9月、『かえりみはせじ』は出版
日本軍捕虜となったオーストラリア人の記憶

とする。翻訳には詩人として既に名を成していた
鮎川信夫が加えられた（64）。そして前述の『朝日
新聞』に加え、『日本読書新聞』、『図書新聞』で
紹介され好評を得る。さらに、図書館志願図
書にも選ばれている。このことからも、日本社会
で当時相当注目が寄せられていたことが伺える。

結局、早川書房の初回配布部数は5,000部
と定められた。早川版会計報告書によれば1951
年9月27日から1955年12月31日にかけて
配布部数5,000部中4,950部を売り上げる結果となっ
た（65）。

しかし、ここで一つ疑問が生じる。オーストラ
リア兵による体験記の日本語訳出版は、終戦から
現在に至るまで、数えるほどなので、なぜこれほ
ど迅速に、しかもこの時期に「かえりみはせじ」
は出版され、注目を浴びたのだろうか。それは寺
井の後押しだけでは納まらない何かがあったと思
えてならない。

まず考えられる点は、題名「かえりみはせじ」
の問題である。上述のとおり、「no time to look
back」という原題は、『海ゆかば』の一部の「顧
みはせじ」が基になっているものの、オリジナ
ルの「顧みはせじ」が意図するのとは全く異なる
目的をもって題名としてつけられた。しかしなが
ら、「no time to look back」は元々「顧みはせ
じ」から採ったということで、日本版に再翻訳さ
れる段階で、そのまま「かえりみはせじ」として
日本版題名としてつ結つけてしまったのである。

戦時期を生き抜きていた日本人にとって、「か
えりみはせじ」と聞いただけでそれが「海ゆか
ば」だと、分かる者は少なくない。「海ゆかば」
はその美歌的旋律も相まって、太平洋戦争末期
には玉砕や戦死者のニュースのテーマ音楽に使わ
れ、弔歌の色合いを濃くしていてという経緯も
ある。そのため、「かえりみはせじ」の題だけで
この本を手に取った者もいたかもしれないし、あ
る本は逆に敬遠をした者もいたかもしれない。い
ずれにせよ、中身をまだ知らない読者手、題名
だけで判断したという懸念は残る。

もう一つの解釈として考えられる点がある。
1951年9月5日、初めて「かえりみはせじ」の
広告が『読売新聞』1面下の文芸広告欄に掲載さ
れたが、この日の同じ紙面1面を大々的に載った
見出しは「太平洋に新平和」。この日は時を同じ
くしてサンフランシスコ講和会議開催日であった
のだ。善い日本人を加え、反戦を唱えたこの本
は、戦後新たな日本を築き上げるためにも絶好の
象徴として当時の社会に利用されたとは考えられ
ない。そのような『朝日新聞』が代表するよう
な友好的態度ばかり誇張する解釈は、その一方
で、この本の持つもう一つの側面——日本軍の暴
撃や、捕虜の苛酷生活、戦争の悲惨さを目を覚
まししている。そしてその事実から逃避する姿
勢は、現在における多くの高等学校の歴史教科書
でオーストラリアへの攻撃が載せられていないこ
とに端的に示されているように、戦後日本社会に
おける「歴史」の語り伝えられ方がなっている。

6．おわりに

No Time to Look Back は、両国における歪ん
だ解釈の元、オーストラリアではその公共の記憶
にそぐわないが故に排除を余儀なくされ、一方日
本では「公共の記憶」として祭り上げられた。そ
してそのどちらにおいても個人の記憶としては再
評価されることなく、今では静かにいくつかの図
書館でその役目がまた来ることを待ち望み眠って
いる。大戦で死んでいった多くの者たちの絶え
と、その中でも見出された友情、そして強い反戦への
意思と共に。

本稿では No Time to Look Back という小説
を考察し、オーストラリアにおける戦争記憶の多
様性と複雑さを垣間見できた。元捕虜の数が次々
と減っていく中、彼らが残した文学作品から戦争
記憶を読みとる重要性は今後いかに増すであろう。
日英関係のより深い理解のために、一義的には語
ることのできない彼らの記憶をこれからも追って
いきたい。

【注】
(1) Curthoys, Ann. "National Narratives, War
Cmmemoration and Racial Exclusion." Nile, Richard
and Peterson, Michael. Becoming Australian. U of
Queensland P. 1998 等が詳しい。
(2) Australian Studies Association of Japan


(6) Leslie is日本ではレスターと表記されることが多いが、実際はレスターと発音されるべきであるため、本稿ではレスターと統一して表記することとし、既に出版されている物に関してはそのままレスターとして引用する。


(8) レスター・グリーナー「かえりみはせじ」寺井十幅・鮎川信夫訳、早川書房、1951。

(9) 朝日新聞、1951年9月27日、3面。


(11) ibid., 233. (筆者抄訳)


(14) Gerster, Robin. Big-noting: The Heroic Theme in Australian War Writing; op.cit. 237. (筆者抄訳)


(18) 出典不明、「オーストラリア研究会図書館所蔵」Gilbert Inaut's Page 1 June. 1947. 6.

(19) グリーナー、前掲『かえりみはせじ』p.306。


(21) ジョン・W・ダーテ「人種偏見と太平洋戦争に見る米日摩擦の底流」TBS ビジュアル、1987。

(22) ダーテ、前掲「人種偏見と太平洋戦争に見る米日摩擦の底流」p.107.


(25) ケニス・ハリソン『あっぱれ日本兵〜オーストラリア兵の太平洋戦争〜』塚田敏夫訳、成山堂書店、2001、p.120。

(26) グリーナー、前掲「人種偏見と太平洋戦争に見る米日摩擦の底流」p.45。

(27) 小森陽一、佐藤学「プロムナード・知る植民地をめぐる断章」栗原彬他編「越境する知る 日 Grimm 植民地: 越境する」東京大学出版会、2001、p.1。

(28) "Pre-war Australian Perception of the Japanese." op.cit. (筆者抄訳)

(29) ibid. (筆者抄訳)

(30) 原文で記載されている「little」の半数近く、さらに、日本兵が「激怒した」「殴っていた」「つまらなかった」などの一部が日本語版では省略されている。これは日本兵である翻訳者が日本兵のマイナスイメージを弱めるために削除した可能性がある。このように日本兵に不都合な形容を外した日本語訳は、著者の対日認識を歪めて日本の読者に伝える結果となっていることを指摘したい。

(31) Greener, Leslie. No Time to Look Back. op.cit., 7.

(32) ibid., 142.

(33) ibid., 207.

(34) ibid., 146.

(35) ibid., 268.

(36) ibid., 42.

(37) ibid., 33.

(38) ibid., 218.

(39) ibid., 33.

(40) ibid., 33.

(41) ibid., 165.

(42) 前田愛「文学テキスト入門」筑摩書房、1988、p.78。

(43) Greener, Leslie. No Time to Look Back. op.cit., 177.
日本軍捕虜となったあるオーストラリア人の記憶

64 捕虜たちを指す「白人の苦力たち (The white coolies)」という語は、紛れもなく白人捕虜を意味する。そしてそれは、連合軍捕虜の中のオーストラリア先住民アボリジニ兵、さらに白人オランダ人とインドネシア人の混血オランダ兵らを遮蔽する表象以外の何物でもない。(オーストラリアで先住民兵士が認知されたのは1951年である。アダム・エール、『アボリジニ兵士の孫、アダムからのメール』(http://www.max.hi-ho.ne.jp/yoshi-ko/2002/Adam.html) (23 Nov. 2002.) スリランカ人捕虜アランを小説で登場させているにも関わらず、「white」という単語を使い捕虜を一般化していることから、白人としてのグリーナーの構えが垣間見える。

65 Greener, Leslie. No Time to Look Back. op.cit., 242.
66 ibid. 108.
67 ibid. 90.
68 ibid. 137.
69 ibid. 221.
70 ibid. 273.
71 ibid. 263.
72 ibid. 145.
73 ibid. 150.

Lawrence, Tess. "People on Wednesday." op.cit., 12.
67 堀雅昭『戦歌が鳴る近代』avan書房，2001。
68 Greener, Leslie. No Time to Look Back. op.cit., 220.
69 溝口織子『古代氏族の系譜』吉川弘文館，1987。
70 Greener, Leslie. No Time to Look Back. op.cit., 280.
71 ibid., 143.
72 オーストラリア国立図書館に保存されていた領収書を筆者が計算したものである。
73 4 March. 1952. オーストラリア国立図書館に保存されているグリーナーの遺品から、出典不明の切抜きの形で見つかったもの。
74 「かえりみはせじ』の“あとがき”では、寺井が『海ゆかば』の詩の抄訳を担当し、他は鮎川が担当したとされているが、寺井とグリーナーの往復書簡を見ると限りでは、この点は疑問である。
75 未公刊、オーストラリア国立図書館所蔵。

＊本稿の作成にあたり、以下の方々のご好意を授かった。まず、レズリー・グリーナーの令息であるガイ・グリーナー氏、レズリーの長年の友人マックス・アンガス氏、そして寺井十輔のご長女大澤那智子氏である。三者の方々にインタビューを引き受けていただいたほか、貴重な資料をご提供いただいた。また、レズリーのご養女であるヘリーン・チャン・マーティン氏からは、レズリーに関するオーストラリア国立図書館所蔵資料の閲覧承諾を頂いた。改めて感謝の意を表したい。
SUMMARY

An Australian POW's Memory at Japanese Internment Camp:
From a Novel, No Time to Look Back

Miyo Sakuma
[Department of Child Studies, Chiba Keizai College]

This paper examines the novel, No Time to Look Back (1950), written by Leslie Greener, an Australian ex-Prisoner-of-War (POW) in Changi. By analysing his representation of the old enemy, the Japanese, and the POW themselves along with the atrocities of both sides and the meaning of the title, we can find that the novel is future-oriented and filled with humanity. At the same time, however, it faces the reality of POW life in the predicament and the foolishness of human beings. Due to this two-sidedness, No Time to Look Back was manipulated for each country's own sake: being discarded in Australia as deviation from the national memory and on the other hand being utilised in Japan for celebrating Australia-Japan friendship in spite of the war. This novel is worthy of a revaluation in order to rethink the past and future of the Australia-Japan relationship.